

東南アジア考古学最前線

組織委員会挨拶	10
文部科学省挨拶	11

Aセッション 基調講演

アジアの考古発掘と21世紀	石澤 良昭	16
過去の文化価値体系が集積された考古発掘 / 経済大規模開発にともなう考古発掘 グローバル化と固有世界存続を証明する考古学 / アジア考古学に向けての理論構築 アジア各地の考古発掘研究はもうひとつの普遍的世界を提示する / 考古学は21世紀の学問体系		

Bセッション 貝塚と土器

フィリピン、ラロ貝塚での人々の暮らし	小川 英文	22
はじめに / 狩猟採集民とは / カガヤン川流域の貝塚群の特徴 / 貝塚群の発掘調査 ラロ貝塚群の立地条件 / 貝塚での発掘調査法 / 平野部の貝塚調査 / 現在の貝採集法 洞穴遺跡での発掘 / ラロ貝塚群での生活史 / ラロ貝塚の環境復元		
フィリピン、ルソン島北部の土器	田中 和彦	34
ルソン島北部地域とカガヤン渓谷 フィリピンにおける先史時代の編年研究とカガヤン渓谷の考古学 マガビット貝塚(後期新石器時代) / カトゥガン貝塚(後期新石器時代から金属器時代にかけて) バガッグ 貝塚(金属器時代) / カガヤン川下流域の土器編年		

Cセッション 銅鼓と巨石

ベトナム、ランヴァク遺跡とドンソン文化	今村 啓爾	48
はじめに / ランヴァク遺跡の発掘 / ランヴァク地点の墓葬 / ランヴァク地点の年代 ソムディン地点の集落址 / 周辺の文化との関連 / 南方地域との関連 ドンソン文化の時代的背景 / ランヴァク遺跡の位置づけ / 弥生文化も視野に置いて		
メコン河をめぐる古代文化	新田 栄治	59
はじめに / 金属器の始まりと地域性 / バンチェン文化の遺跡の特徴 / 青銅器鑄造遺跡 東北タイにおける製鉄遺跡 / 製鉄法と原材料 / 東北タイの製塩遺跡 / 製塩法 人口増加と環濠集落 / 有力者の誕生 / 統合化社会から国家へ / おわり		
ラオス、ジャール平原の巨大石壺の謎	山崎 純男	69
はじめに / アン村の石壺群の概要 / 石壺の役割 / 石壺の型式分類 ラッカイ村の概要 / ラッセル村の石壺群 / アン村217号石壺の発掘 / おわりに		
インドネシアのピラミッド	江上 幹幸	78
レバツ・チベドゥ遺跡とは / 遺跡の周辺地域 / チベドゥ集落の生活と情景 レバツ・チベドゥ遺跡 / 壇状ピラミッドの様相 / 新たに確認された遺構 遺跡周囲の調査 / バドゥイ人の世界観 / バドゥイの人々の生活		

Dセッション 文明の誕生と国家の始まり

ベトナム・南中国の古代貿易	西谷 大	90
ネットワークの構築 / 古代中国との交易ネットワークの構図 / 海南島における物流と文化の変遷 古代中国への朝貢品 / 考古遺物にみる南方域との交易 / 古代中国における物価 / 漢時代の食生活 中国皇帝の生活 / 古代中国との交易 / まとめ		

目次

甕棺から王国へ - ベトナム中部、チャンパの誕生 -	山形真理子	98
時代背景 / サーフィンから林邑へ / サーフィン文化の分布 / サーフィン文化と中国 林邑と中国 / トゥーボン川流域の遺跡 / ピンイエン遺跡の発掘調査 / ゴーカム遺跡の封泥 チャーキュウ遺跡 / 国際情勢のなかの林邑		

東南アジアの古代文明はなぜ相対的乾燥地に生まれたか	福井 捷朗	111
東南アジアの古代文明とは / 6文明の共通点 古代中国南部にみる原始的農法 / 現代のボルネオにおける湿地稲作 直播稲作の特徴 / 直播稲作の適地 / 直播稲作から田植法へ 「直播 田植」仮説をめぐるその他の手掛かり / 人口圧、田植化、低地進出		

Eセッション 陶磁貿易と海の道

クメールとチャンパの陶磁器 - 生産と流通 -	青柳 洋治	120
クメールとチャンパの陶磁器とは / クメール陶器の生産地と窯 タニ村の窯跡群と調査 / タニ窯跡群 B 区 1 号窯 (B1 窯) の構造 クメール陶器の製品と窯道具 / チャンパ王国の特徴 / ゴサイン窯の調査 ゴサイン窯の年代 / チャンパ陶器の年代と海上交易のネットワーク		

東南アジアの土器づくり	小野 正敏	129
はじめに / 焼物の製作技術を調査する視点 / 一乗谷出土の謎の土器と交易 タイの土器づくり技法 / 土器胎土にみる地域差 / 土器の焼成と窯の構造 土器づくりの変化と村の環境変化 / おわりに		

ベトナム、ホイアン日本町跡	菊池 誠一	140
日本町の発掘調査の目的 (表 1) / ホイアンの町並み外観 / 日本町の情景 日本町の位置推定 / 日本町の推定地 / ホイアン郊外での発掘調査 食器様相にみる日本町の推移 / ベトナム産焼物の産地を探る ベトナム産焼物と日本 / 日本町をめぐる交易ネットワーク / おわりに		

インドネシア、バンテン王国とアジアの海上貿易	坂井 隆	149
バンテン王国とは / バンテン・ラーマの発掘調査 / 陶磁貿易の商品と貿易品容器 バンテンの貿易活動範囲 / 18 世紀のジャンク貿易 / 生きている遺跡 遺跡の保存活用と今日の意味 / 国際協力の意義		

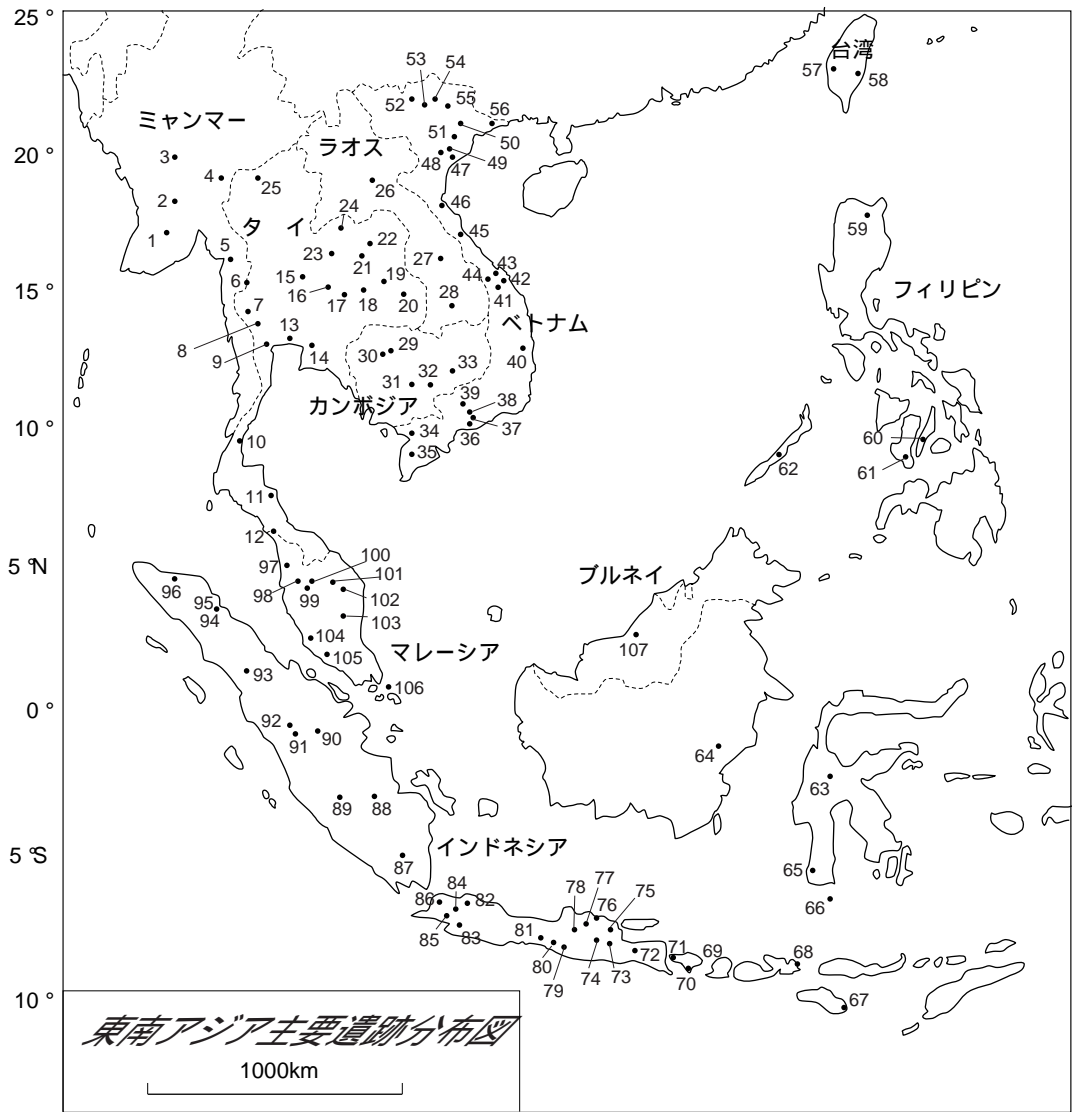
Fセッション パネルディスカッション

東南アジアの考古学はおもしろい		160
-----------------------	--	-----

新田 栄治 / 今村 啓爾 / 江上 幹幸 / 小川 英文
菊池 誠一 / 坂井 隆 / 山形真理子

貝塚を残した人々とは / リンリンオーの分布と年代
サーフィン文化圏におけるリンリンオーの分布の意義 / リンリンオーの形態と分布域
ドンソン文化の多様性 / チャンパ文化の人面紋瓦 / チャンパ文化とインドの影響
インドネシアのピラミッド遺構の意味 / バドゥイ以前に建設された山岳信仰のモニュメント
ベトナム産の胴長壺の用途 / アンビン壺にいでて運んだものとは
なぜ、日本町に肥前磁器が輸出されたのか / イスラム圏の食生活と大皿 / なぜ、東南アジアなのか
東南アジアでは考古遺物が今もつくられている / インドネシアでの海の民と山の民の交易
なぜ、東南アジアの考古学なのか / 東南アジアの考古学にも目を向けて

演者紹介		172
------------	--	-----



- | | | | | | |
|-----------------|----------------|--------------|-----------|---------------|---------------|
| 1 シュリクシェートラ | 21 バンナディ | 41 チャキウ | 61 ソラミロ | 81 ボロブドゥル | 100 グヌン・ルトゥ洞窟 |
| 2 ベイタノ | 22 パンチェン | 42 ホイアン | 62 タボン洞窟 | 82 ジワ | 101 チャ洞窟 |
| 3 バガン | 23 ノンノクタ | 43 タムミ | 63 レンケカ | 83 グヌンバダン | 102 ムサン洞窟 |
| 4 バダリン | 24 プーロン | 44 ミソン | 64 クタイ | 84 タールマ | 103 クチル洞窟 |
| 5 タトン | 25 スピリット洞窟 | 45 パウチョ | 65 パッタエ洞窟 | 85 レパッ・チベドゥツ | 104 カンボン・ |
| 6 オンバ | 26 パンアン | 46 ランヴァク | 66 スラヤール | 86 パンテン・ギラン | スンガイラン |
| 7 サイヨク洞窟 | 27 ターン島 | 47 ダブート貝塚 | 67 ムロロ | 87 ブゲン・ラハルジョ | 105 マラッカ |
| 8 バンカオ | 28 ドンソン | 48 ドンソン | 68 サンゲアン | 88 パレンバン | 106 ティオマン |
| 9 クプア | 29 アンコール・トム | 49 ホアロク | 69 プジェン | 89 パスマ | 107 ニア洞窟 |
| 10 リゴール | 30 アンコール・ワット | 50 ゴーチェンヴァイ | 70 グヌンカウイ | 90 ムアラ・ジャムビ | |
| 11 サティンブラ | 31 サムロンセン | 51 チャウカン | 71 ギリマヌツ | 91 ティアンコ・ | |
| 12 プキッ・トゥンク・ルムブ | 32 イーシャナプーラ | 52 ゴームン | 72 コトギラン | バンジャン洞窟 | |
| 13 ナコムバトム | 33 サーン島 | 53 フングエン | 73 トロウラン | 92 ムアラ・タクス | |
| 14 コックバナムディ | 34 アンコール・ボレイ | 54 ルンホア | 74 ケベック洞窟 | 93 バダン・ラウス | |
| 15 カオウォンブラチャン | 35 オケオ | 55 ドンダウ | 75 グレシッ | 94 ランタウ・パカム貝塚 | |
| 16 ノントゥンビーボン | 36 ノンカー・ヴォソソフェ | 56 ベトケ | 76 ブラワンガン | 95 コタ・チナ | |
| 17 バンドンブロン | 37 スアンロク | 57 台南 | 77 トリニール | 96 サムドゥラバサイ | |
| 18 ノンヤン | 38 ハンゴン | 58 卑南 | 78 サンギラン | 97 ブジャン | |
| 19 カーニルアン | 39 ソクチュア | 59 カガヤン溪谷洞窟群 | 79 ウォノボヨ | 98 クルバウ洞窟 | |
| 20 ドンタン | 40 サーフィン | 60 セブ | 80 ブラムバン | 99 コタ・タンバン | |

アジアの考古発掘と21世紀

石澤 良昭

上智大学アンコール遺跡国際調査団長・上智大学外国語学部教授

過去の文化価値体系が集積された 考古発掘

アジアの考古発掘研究は、巨大文明を除きこれまで対象別・地域別・時代別的に考えられてきましたが、これまでそれらを世界史の文脈、もしくは文明史の流れのなかで考え、位置づけ、価値づけ、そして評価することは多くありませんでした。考古学そのものは人文科学系に属し、それだけで完結してきました。日本国内では最近、三内丸山遺跡や飛鳥池遺跡の発掘などで空前の考古学ブームを引き起こしています。各地の考古遺跡には多くの訪問者が集まり、熱心に質疑応答が行われています。こうした多数の愛好者や観光客が考古遺跡や史的記念物を見物するのにもない、看板の整備からはじまり、インフラの整備、景観の保全、文化観光とその対策、文化施設の充実が求められ、観光と考古遺跡保護との間に緊張関係が作りだされてきました。

経済大規模開発にともなう考古発掘

考古学およびその隣接諸科学研究は、21世紀の時代の要請に応える学問体系です。なぜ私たちはアジアの考古学を科学するのでしょうか。21世紀は地球の一体化が進行すると同

時に、民族・人口・食糧・環境などの世界的な諸問題が噴出してくる時代となるでしょう。こうした問題が身近に迫ってくると、過去の物質文化や考古遺跡を見直そうという気持ちが起こってきます。そして、考古出土品や現地に復元された往時の建造物を観察しながら、私どもは自分たちのより遠い過去の祖先の生活や、そのなりわいに思いを寄せる旅人となるのです。

世界では1950～60年代にかけてアジア諸国の多くの国が政治的独立を達成し、その後、彼らは第3世界として先進諸国に追いつくため重厚長大の経済開発を急いで実施してきました。それにより貧困から抜けだしてより豊かな生活を夢みていました。こうしたアジア諸国における大規模な経済開発は、どこでも直接的に、間接的に考古発掘がともなうと同時に新発見につながるが多くなっていました。

また、重要な考古学遺構であるため、建設計画の変更や工事の中止などがしばしばありました。そして、地域住民からは考古遺跡を守れというキャンペーンが繰り返されてきました。例えば、エジプトのアスワン・ハイダム(Aswan High Dam)建設(1960～70)にともない考古発掘とアブシンベル(Abu Sim-

bel)神殿の移設(1964～68)が提起され、その機会に人類のかけがえのない文化遺産・記念物を保全しようとするキャンペーンが叫ばれました。同時並行して、各地のS.O.S.自然・文化遺産運動がもりあがり、やがてユネスコにより『世界遺産条約』(1972年採択)としてまとめられました。

グローバル化と固有世界存続を 証明する考古学

世界的諸問題は地殻変動をともなった激動の波を起こしつつ、通信・交通手段のIT革命(Information Technology Revolution)や市場経済の世界化が、地球の一体化(グローバリゼーション)が進むなかで展開されています。これらの世界的諸問題は同時に、歴史的・考古的遺産を含んだ各地域において開発優先か、保存優先かという衝突を引き起こしつつあります。こうした地球の一体化は、大きな流れとして一種のアメリカナイゼーションであり、アメリカ発の諸基準が世界を支配しているといえます。地球化・世界化に対抗して考古発掘や歴史研究は民族的独自性(National Identity)および文化的多様性(Cultural Diversity)を考えるきっかけをつくりだし、それが地方のレゾレ・デトル(存在理由)を主張するひとつの考え方としてとらえられてきました。

90年代にはいり、歴史・考古を中心とする世界文化遺産は人類全体にとって普遍的な価値をもつものとして考えられ、その一部は戦争や自然災害、環境汚染、盗掘により破壊の危機に瀕し、それが引き金となってさらに保護についての世界世論が高まってきました。そして、考古遺跡や大遺跡のある近隣の地域住民や自治体がそれを保護しようという運動にまで広がり、活発となってくることになりました。

こうした考古遺跡や文化遺産の概念とこれ

を保全しようという思想は、過度の経済開発・戦争・公害汚染などから遺産を守ろうとする過程で生まれ、形成され、成長し、展開してきたものです。この考古・文化遺産を守る考え方は、世界的諸問題という大きな波に対抗して、自然環境や民族固有の歴史・考古遺跡や文化や伝統を保全し、地域の自然のユニークさ、および文化の多様性を体現するものとして高く評価されてきました。

この歴史・考古遺跡は世界のなかで金では買えない自然的・人間的価値(natural values / human values)を保持し、アイデンティティそのものを表示する大きな役割をはたしています。ここに考古学および歴史学の重要性和学問的背景を再構築し、地球規模で科学する意義が生まれてくることとなります。

考古遺跡の調査研究と保存修復の必要性および緊急性については、すでに多くの議論がなされてきました。これらの研究保存の事業は、世界の均一化現象とは反対に、個性豊かな物質生活と民族の伝統、その国(地域)の固有の文化および歴史成果を私どもに実証してくれます。当該の考古発掘や歴史発見に基づき、住民は民族的誇りと自信をもつようになり、自国の歴史の研究が深まり、各国政府は考古遺跡の保存・修復とその公開を重要な文化政策に位置づけていくこととなります。考古・文化遺産研究の現代史的な意義は大きいといわねばなりません。

アジア考古学に向けての理論構築

これまでの考古学をより深め、透徹力のある科学として存続させるためには、自然・社会などほかの学問分野を融合した新たなる「知」の体系が必要となり、大きな枠組みの理論構築が求められるようになります。

考古学は、まず第1に、対象となる考古遺産を綿密な調査研究により深く掘り下げ、そ